広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第67号　2018　135－140

日本人大学生英語学習者への授業内発音指導に関するアンケート調査の分析

渡　邉　勝　仁
（2018年10月４日受理）

A Survey Analysis of Pronunciation Instruction in Japanese University English Learners

Katsuhito Watanabe

Abstract: The purpose of this study is to investigate how Japanese university English learners consider pronunciation instructions at their university and also assess their belief in their English-speaking abilities in creating new pronunciation classes. A total of 102 university students were given a survey containing 10 questions exploring the needs for creating new pronunciation classes, with responses using a five-point Likert scale. The results show some significant findings: i.e., many students expressed a strong desire to take pronunciation classes during their university studies and most students expressed a high desire to improve their English pronunciation for their own future benefit.

Key words: pronunciation, English education, survey, secondary school education
キーワード：発音，英語教育，アンケート調査，中学・高校教育

１．本研究の目的と背景

１．１　目的

本研究の目的は，日本人大学生英語学習者が，発音向上を目的とした授業内発音指導に対し，どのような意識を持っているのかを把握することである。その方法としてアンケート調査を実施し，その結果を基にデータを分析し，今後の新規授業開設を目的とした，初期段階の研究である。

現在英語の発音に関する授業が行われていない都内私立大学の１学部において，アンケート調査を実施する。質問は10項目であり３つの分野に分類する。それらは，（１）中学・高校での発音の授業の頻度はどうであったか，（２）現在学生がどの程度発音に特化した授業を求めているのか，最後に（３）就職活動を含め将来的に英語の発音はどの程度重要視しているか，を把握するためのアンケート調査である。

１．２　国内外での発音教育の背景

我が国の中学・高校を含む英語教育において，コミュニケーション能力の向上が重視され始めて久しい。コミュニケーションばかりに焦点をあてた教育を受けてきた生徒や学生は，果たして明瞭性のある発音を含んだ語学能力を身につけてきているかは疑問である。日本の英語発音教育の背景として手島（2011）は，中学・高校の発音指導の問題点は，英語教員が発音の指導法を教職課程などで学んできていないことが原因の１つであるとしている。中学・高校の英語教員を目指す大学生が卒業までに，英語音声学などの授業を学んだ経験が少ないため，英語教員として発音の確信が持てず，ましてや発音指導の方法はわからない，としている。また Saito（2012）は，機械的なドリル・繰り返しなどの教授法に依存しすぎの発音教育は，数十年前の audio lingual teaching method を思い出させ，ごくわずかな人数の言語教育者以外は，十分な発音指導教育を受けていないとしている。このようなこ

とから，日本人を含め，英語を母語，第２外国語または公用語としていない人口は急激に増え続けていて，必ずしも Native Speakers（NS）である母語話者と，Non-Native Speakers（NNS）の非母語話者の間の会話だけではなく，NNS 同士の会話も多く存在し，また，NNS の第１言語が影響された英語の多様化も増加している。

本研究では大学英語教育への提案として，発音に特化した授業を新規開設することを目的とした，大学生およそ100人へのアンケート調査を実施する。

２．先行研究

２．１　明瞭性のある発音

近年，英語を母語，第２外国語または公用語としていない人口は日本人を含め，急激に増え続けていて，必ずしも Native Speakers（NS）である母語話者と，Non-Native Speakers（NNS）の非母語話者の間の会話だけではなく，NNS 同士の会話も多く存在し，また，NNS の英語の多様化も増加している。Jenkins（2000）は，English as a Lingua Franca（ELF），または English as an International Language（EIL）が会話で使用される状況においては，大多数の NNS 話者同士がお互いを理解できるような発音であれば問題はなく，間違いではないとしている。更には，このような NNS 同士の会話を，NS 話者が積極的に理解する必要があるとしていて，発音教育に関しての明瞭性（intelligibility）の向上が取り上げられている。

２．２　Lingua Franca Core

Lingua Franca Core（LFC）は，Jenkins（2000）が定める基準であり，NNS 同士が会話をする際の通じやすさ，すなわち明瞭性に影響のある要素を LFC と定めており，それ以外の要素を non-core としている。LFC は５つの項目からなっており，それらは以下の通りである。

①（条件付き）全ての子音音素
②音声の必要条件（/p/, /t/, /k/ の後の気息音）
③子音連続
④母音
⑤核強勢の配置と音調群の区切り

上記の項目は，EIL での会話で間違いが起こりやすいという観点から EIL を教える場では，最重要項目として教える必要があるとしている。ここで重要性が高いとされるのは，③の子音連続であり，これが重要である理由として，子音連続を習得する以前に①の全ての子音音素を習得することが必要不可欠である。さらに，②の音声の必要条件では，/p/, /t/, /k/ の後の気息音に注意することとある。その結果として，③を習得するには，①と②が習得済みであることが条件であり，子音連続を習得するということは，少なくとも LFC の他の２項目も習得する必要がある（Watanabe & DiNunzio, 2018）。このことからも，発音教育の重要性を認識することができる。

２．３　中学・高校での発音調査

中学・高校での発音学習に焦点を当てた大塚・上田（2011）の研究では，英語を専攻しない私立大学の学生を対象にチェックシートを導入し，強勢，イントネーションさらには発音記号などについて調査を行っている。特に発音記号については，２割に満たない低い正答率であったと報告している。その結果，中高の学習履歴および定着度調査が，大学でのより適切な音声指導への指針となるとしている。

さらに篠崎（2015）は，中学生157人に対しアンケート調査を行っている。内容としては，日本人中学生が目指す発音はどこにあるのかに焦点を当てたものである。その結果は，約65％の調査対象者が授業で習いたい英語は NS からであると答えた。また，どの国の英語をモデルにした発音を学習したいかとの質問に対し，多くの学生がアメリカやイギリスの発音と答え，日本を選んだものはごくわずかであった。さらに，77％が NS の発音に近づきたいと答え，このことから少しでも NS と同等の発音を身に着けたいと考えていることがうかがえる。

中学・高校一貫校に通う中学３年生155人の対象者でアンケート調査を実施した藤原（2013）は，５段階評価を採用しており，問１の「発音はネイティブ並みにうまくなりたい。」では，平均3.22で，最も平均が高かった（4.11）質問13の内容は，「正しい発音のためには英語をたくさん聞くことが重要だ。」で正しい発音を習得するには，正しいインプットが必要であると考えている学生が多いと考えられる。

２．４　高校・大学での発音調査

中西（2008）が実施した調査では，対象者が日本の高校・大学生461人であり，内容としては学生の意欲と動機付けに関してであった。NS 発音の習得意欲の項目に関しては，大半の学習者が自分の発音は NS に近いとは思わないとしている。しかしながら，８割以

上の学生は習得を諦めるわけではなく，高い意欲をもっていることがわかっている。

最後に本研究の研究課題として，「発音に特化した新しい授業の開講はどの程度の必要性があるか」を調査の結果から考察する。

3．調査方法

3．1　調査の目的

本調査の目的は，日本人大学生英語学習者への授業内発音指導に関するアンケート調査の分析結果を明らかにし，新規授業開設を目的としたものである。

3．2　方法

都内私立大学１学部の１年生102名を対象に，アンケート調査を行った。アンケート紙に関しては，篠崎(2015)や中西(2008)，藤原(2013)を参考に作成した。質問項目は合計10個であり，５段階評価（とてもそう思う，そう思う，どちらともいえない，そう思わない，全くそう思わない）を導入した（添付資料参照）。質問紙には記載されていないが，全10項目の質問は３つのグループに区分される。それらは，（１）大学入学以前（中学・高校）は質問１～３，（２）大学在学中（就職活動含む）は質問４・５・10，（３）大学卒業後は質問６～10である。質問10がグループ２つに重複する理由として，「発音が良いと，就職に役立つ。」であるので，就職活動中及び卒業後の２つの場面が考えられるからである（表１）。

表１　アンケート調査の質問項目

	質問項目
1	中学校で授業中定期的に発音指導があった。（週１・月１など）
2	高校で，授業中定期的に発音指導があった。（週１・月１など）
3	大学では，入学以前発音の授業があると思った。
4	大学で発音の授業は必要だ。
5	大学で発音の授業があったら，受講したい。
6	発音は，英会話にはとても重要だ。
7	将来的に，発音を上達させたい。
8	日本人の英語が通じない原因は発音だ。
9	カタカナ英語の発音で十分に通じる。
10	発音が良いと，就職に役立つ。

3．3　対象者

調査の対象者は，都内私立大学にある１学部の１年生のみ102名と５名の留学生で，その中には帰国子女や海外経験者も含まれている。しかしながら，これらの学生を背景ごとに分類するのは困難なため，すべての学生を対象とした。留学生の５名には，問１と２の記入をしないように促した。その理由は，学生が日本の中学・高校でどのような発音指導を受けたかを知りたかったためである。

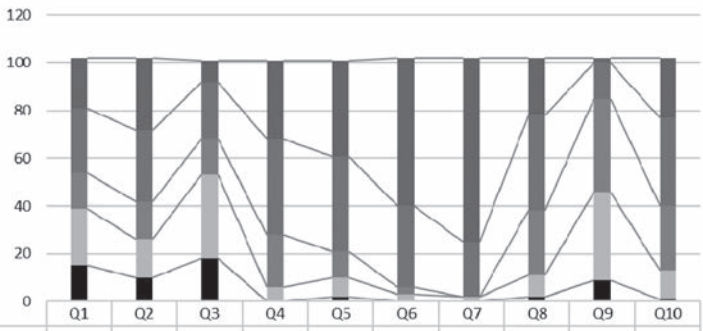
4．結果

学生が英語発音指導・授業に関してどのような考えを持っているのか，全体的な傾向を把握するため，項目別に表した（表２）。３．２の方法で明記した通り，全10項目の質問は３つのグループに区分される。それらは，（１）大学入学以前（中学･高校）は質問１～３，（２）大学在学中（就職活動含む）は質問４･５･10，（３）大学卒業後は質問６～10である。アンケート調査紙には，自由記述の解答欄を設けていなかったが，２名の学生がコメントを記入している。１つ目は，中学・高校の発音指導に関してであるが「単語の発音だけだった」とあり，長い文章などの発音指導はなかったと考えられる。２つ目のコメントは，「発音のための授業があった訳ではなく通常の英語の授業内での指導」さらには，「中学一貫校（先生が同じ）」とあった。このことから，６年間同じ先生からある程度の発音指導があったことが伺える。

4．1　グループ（1）

このグループは，大学入学以前，中学・高校での発音指導に関しての質問である。質問１は，中学校での発音指導である。授業中に定期的に発音指導があったかどうかであるが，「全くそう思わない」と「どちらともいえない」が同じ15％で，他と比べ多少低い数値となっている。最も数値が高かったのは，「そう思う」の27％であった。次に24％の「そう思わない」である。どの５つの項目も問１全体的には，おおまかに均等に分散していると言える。「とてもそう思う」と「そう思う」を合計すると47％で，おおよそ半数の学生が少なくとも，指導を受けてきたと言える。質問２は，高等学校での発音指導である。結果は，「とてもそう思う」と「そう思う」がそれぞれ29％で，合計すると58％であり，合計102名の学生の半数以上を占める数値である。「そう思わない」は16％で，「全くそう思わない」

表２　アンケート調査の結果



	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9	Q10
■とてもそう思う	21	30	9	33	40	62	77	24	2	25
■そう思う	27	30	24	40	40	34	23	40	15	37
■どちらともいえない	15	16	15	22	11	3	0	27	39	27
■そう思わない	24	16	35	6	8	3	2	9	37	12
■まったくそう思わない	15	10	18	0	2	0	0	2	9	1

の10％と合計すると26％であり，おおよそ４分の１である。質問３は，「大学入学以前に発音の授業があると思った。」である。もっとも多かった「そう思わない」は34％であり，「まったくそう思わない」の18％と合計すると半数以上であった。「とてもそう思う」と「そう思う」を合計しても，32％と低い数値であった。

４．２　グループ（２）

このグループは，大学在学中に焦点をあてた質問３つである。合計10の質問では，特に重要であると考えられる。質問４は，大学での発音の授業は必要かどうかを問う質問で，もっとも多かった回答が40％の「そう思う」であり，その次に多かったものが，「とてもそう思う」で32％であった。２つの合計が，72％であることから，過半数以上が大学での発音の授業は，必要であると感じていると確認できる。質問５は，「大学で発音の授業があったら受講したい。」であり，もっとも重要な質問であると言える。「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が78％であり，調査対象者の合計が102名であることから約８割の学生が発音に特化した授業の受講を望んでいると考えられる。そして，このグループ最後の質問は，質問10の発音が良いと就職に役立つかに関してであるが，もっとも多かった項目は，「そう思う」の36％であり，「とてもそう思う」が25％であった。合計すると61％であり，過半数以上が就職に有利であると考えている。「どちらともいえない」が26％であり，27名の学生は，具体的にはどのように考えているのかが懸念される。

４．３　グループ（３）

最後のグループは，主に卒業後と将来的な状況に焦点をあてた質問グループである。質問６は，「発音は，英会話にとても重要だ。」という問いであるが，厳密にはすべてのグループに適用されると考えられるが，将来的に就職後社会人になった時より多く会話をする機会が増えてくるであろうことから，グループ（３）に分類した。「とてもそう思う」が61％で，「そう思う」は33％であった。合計すると94％で，「全くそう思わない」に至っては「０」であり，発音の重要性を伺える。次に質問７は，将来的に発音を上達させたいかどうかに関した質問で，「とてもそう思う」の項目が本研究のアンケート調査では，もっとも高い数値であった75％を記録した。「そう思う」の23％を加えると，98％となり，ほとんどの学生が発音を上達させたいと思っている。「どちらともいえない」と回答した被験者は一人もいなかったが，「そう思わない」と答えた学生が２名いた。質問８は「日本人の英語が通じない原因は発音だ。」であり，もっとも回答が多かった項目は「そう思う」で40名の学生が答えた。しかしながら，「どちらともいえない」と答えた学生が，27名いたことから，日本人の英語は，発音だけではないということを理解しているのだとも推測できる。このグループ最後の質問９は「カタカナ英語の発音で十分に通じる。」である。「どちらともいえない」の回答が

もっとも多く38％であった。「そう思わない」が36％で，「全くそう思わない」の９％と合計すると45％で過半数以下ではあるが，多くの学生がカタカナ英語には，懐疑的であると言える。

５　考察

本アンケート調査の結果から，大学１年生102名が英語発音指導や発音に特化した授業に関して，どのようなことを考えているのかがとてもよく理解できる内容のもの，さらなる調査が必要なものがあることが分かった。特によく理解できた内容について，４．結果と同じ３つのグループで考察する。

５．１　グループ（１）

このグループでは，大学入学以前についての３つの質問であるが，質問１は中学に関してである。「とてもそう思う」から「全くそう思わない」まである程度，均等に分散していることがわかる。「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が47％で，約半数の学生に発音指導が定期的にあった。ここで注目すべき点としては，中学校は義務教育であるが，公立と私立の中学では英語の発音の授業に対して，指導方法が大きく異なることもある可能性があるので，このような結果になったと考えられる。さらに質問２では，「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が59％であり，被験者が通う高校は，ほとんどの場合進学校であったと推測ができることから，中学よりも12％ほど数値が上がったと考えられる。しかしながら，質問３の結果から，多少懸念される。それは，「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が32％で，全体の約３割程度である。あまり多くの学生が大学入学前に，発音の授業に期待していなかったと思われる。もっとも多かった項目は，「そう思わない」であり，34％であった。「まったくそう思わない」の18％との合計は52％であり，半数以上の被験者が大学には発音の授業の設定が無いと考えていたといえる。このグループでは，質問３が今後の新しい授業開講への鍵を握ると思われる。

５．２　グループ（２）

このグループは，大学在学中の英語発音指導および授業に関してである。質問４では，大学での発音の授業の必要性に関してであるが，「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が72％であり，おおよそ４分の３の学生が必要と感じている。この結果から，早急な発音に特化した授業の開講が望まれる。この結果の意味として，将来的に英語の発音の向上を目指しているのではなく，少なくとも大学在学中の４年間で発音の勉強をしたいということになる。質問４を踏まえ，質問５では，さらに特筆すべき結果が出ている。「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が39％ずつの78％である。これは，約８割の学生が，発音の授業があったら受講したいと考えている結果である。これらの２つの質問を考慮するとかなりの割合であることが分かる。最後に，質問10の発音が良いと就職に有利である，に関しては，あくまでも学生の推測ではあるが，「とてもそう思う」と「そう思う」を合計すると61％でそれぞれ25％と36％であった。ここでも，半数以上という結果で，学生の意識の高さが伺える。このグループでは，質問４・５の回答から，発音の指導に関して，非常に高い意識を持っていると考えられる。

５．３　グループ（３）

このグループは，将来的または近未来に焦点を当てた質問６～９である。質問10に関しては，前項で説明しているので省略する。質問６は，英会話での発音の重要性に関した質問であるが，英語発音には個々の子音音素や母音音素だけではなく，強勢やイントネーションといった多くの項目があり，学生がどれだけ把握しているかは未知数である。しかしながら，現段階では学生の漠然とした意見として考慮し，新しい授業開講に向けての参考とする。「とてもそう思う」が，61％と半数以上の高い数値である。「そう思う」の33％と合計すると94％で，ほとんどの学生が発音の重要性を認識しているという結果に至っている。質問７は，「将来的に，発音を上達させたい。」で，「とてもそう思う」が，75％と本研究のアンケート調査では，もっとも多い数値となっている。「将来的に」とあるので，必ずしも大学在学中に上達させたいと考えている学生がほとんどであるとは言い難い。しかしながら，質問４・５と大学生である時期の近未来に習得したいと考えている学生も少なくないであろう。「そう思う」の23％と合計すると98％となり，総数102名の実験対象者と比較すると発音の重要性を理解することができる。質問８の日本人の通じない原因は，発音にあると考える学生も，「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が63％と高い数値である。しかしながら，「どちらともいえない」と答えた学生が27名いることから，全体のおおよそ４分の１は，他の原因にあるとしている。質問９は，カタカナ英語は通じるかどうかという内容であるが，「どちらともいえない」と答えた対象

者は39名で，カタカナ英語でも通じる部分もあると考えられる。

6．結論

今回の調査で学生がどのように発音指導や授業に関して考えているかが，明らかになった。中学・高校での発音指導は，学生一人ひとりが異なった環境で受けてきたであると考えられる結果であった。今後の調査では，あまり重要ではない項目として考慮する。質問４～７では，「とてもそう思う」と「そう思う」の合計が大多数を占めていて，学生の発音指導に対しての高い意識が伺える結果となった。これらの数値から，今後の早い段階で，本研究の課題である，新しい発音に特化した授業の開講は早急に対応するべきであると考えられる。

7．今後の課題

発音に特化した授業を開講することは，容易なことではない。すでに存在する英語の必修科目である授業での新たなアクティビティーなどで対応できないかと，提案されることは容易に推測できる。今後の課題として，さらなる重要性を確立することが求められる。今回のアンケート調査からの課題として，以下が挙げられる。①アンケート調査の質問が10項目のみであったため，多くの情報の取得が困難だったという結果になった。②質問の内容が漠然としすぎていた。自由記述の欄を設けて，学生からの詳細なコメントを入手することも重要である。今後，さらなるアンケート調査を行い，詳細について把握する必要があると考えられる。

【参考文献】

Jenkins, J. (2000). *The phonology of English as an international language*. Oxford University Press.

Saito, K. (2012). Effects of instruction on L2 pronunciation development: A synthesis of 15 quasi-experimental intervention studies. *TESOL Quarterly*, **46**, 842-854.

Watanabe, K., & DiNunzio, N. (2018). Effectiveness of Teaching Onset Consonant Clusters for Japanese University Learners of English. *International Journal of Curriculum Development and Practice*, **20**, (1), 11-19.

大塚朝美，上田洋子　(2012)「中学・高校での発音学習履歴と定着度：大学１年生へのチェックシートと質問紙が示唆するもの」『大阪女学院大学紀要』**8**, 1-27.

篠崎文哉　(2015)「日本人が目指すべき音声とは：中学生を対象としたアンケート結果から」『日本国際教養学会誌』**1**, 62-72.

手島良（2011)「日本の中学校・高等学校における英語の音声教育について－発音指導の現場 と課題」『音声研究』**15**, 31-43.

中西のりこ（2008)「英語発音学習に対する学生の意欲と動機付け」『コミュニケーション研究叢書』**6**, 49-57.

藤原愛（2013)「日本人初級英語学習者の発音習得に対するビリーフ」『育英短期大学研究紀要』**30**, 37-45.

（主任指導教員　　深澤清治）

添付資料

英語に関してのアンケート調査

特に当てはまる項目1つに○を付けてください。

		とてもそう思う	そう思う	どちらともいえない	そう思わない	まったくそう思わない
1	中学校で、授業中定期的に発音指導があった。（週1・月1など）					
2	高校で、授業中定期的に発音指導があった。（週1・月1など）					
3	大学では、入学以前発音の授業があると思った。					
4	大学で発音の授業は必要だ。					
5	大学で発音の授業があったら、受講したい。					
6	発音は、英会話にはとても重要だ。					
7	将来的に、発音を上達させたい。					
8	日本人の英語が通じない原因は発音だ。					
9	カタカナ英語の発音で十分に通じる。					
10	発音が良いと、就職に役立つ。					

ご協力ありがとうございました。